

日本曹洞宗の歴史的性格（二）

「道元禅師と隆禪・覚心との交渉を遡つて—

原 田 弘 道

一 はじめに

初期曹洞宗は歴史的に四つの流れが形成された。①は三代相論後、義雲・曇希等の寂円派の永平寺の系統、②は詮慧・経豪の京都永興寺の系統、③は義尹の大慈寺の系統、④は義介・瑩山・明峯・峨山等の永光寺・総持寺の系統である。

この第四の総持寺の系統が後大勢を占め、日本曹洞宗として一大飛躍の礎が築かれたが、特に、この派は、初期において、紀州由良興国寺（西方寺）で無門慧開の法を受け、特異な禪風を挙揚した心地覚心（一二〇七—二九八）の臨済宗法燈派との交渉は密接なものがある。

師三十六歳、依_三城南深草極樂寺道元和尚、伝_三授菩薩戒血脉、道元入宋之時、天童山如淨和尚相伝之血脉也、元乃永平開山仏法上人矣⁽²⁾

『法燈國師行実年譜』に、覚心三十六才の時、道元禅師（一

一一〇〇—一二五三）から、如淨和尚相伝の戒脈を受けたとある。この因縁から道元禅師の弟子義準は「本禪宗依_三仏禪師」

而出家、常隨侍者、長及_三徧參、扣_三皇都五山之關、繼聞_三高野山金剛三昧院、兼_三台密禪」と名を義能と改め、高野山金剛三昧院に入っている。この覚心に徹通義介（一二二九—一三〇九）の法嗣、瑩山禪師（一二六八—一三一五）が参じていることは、「法燈坐_三南紀之興國、師往造、一見大賞_三識之、留過_三冬」と『日本洞上聯燈錄』に見え、覚心の法嗣孤峰覚明（一二七一—一三六二）は永光寺に瑩山禪師を訪ね菩薩戒を受けている。⁽⁵⁾同じく覚心の嗣恭翁運良（一二六七—一三四一）は道元禅師の弟子といわれる出羽玉泉寺の了然法明⁽⁶⁾について出家得度し、⁽⁷⁾後瑩山禪師に参じ、禪師の後、大乘寺に三世として住した。⁽⁸⁾覚明はまたこの法明にも参じたと伝えられている。⁽⁹⁾瑩山下の明峰素哲（一二七七—一三五〇）、峨山紹碩（一二七五—一三六五）は恭翁運良に参じ、覚明の資甲州向嶽寺開山抜隊得勝（一三三七

（一三八七）は峨山紹碩に参じてゐる。⁽¹²⁾

このように非常に密接な交渉が保たれてきたが、これはそもそも道元禅師と覚心との交渉がその始まりである。しかし覚心が仁治三年（一二四二）禅師に伝戒を請う契機となつたのは、十五年前紀州由良庄西方寺上棟慶讃法会に覚心が寺額の篆書を禅師に依頼したこととされるが、果してそう云えるか検討を要する。そこで曹洞宗の性別形成に関連して本論において、この問題をきつかけに、またそれによつて引き出される幾つかの問題を取りあげ、道元禅師と高野山もしくは法燈派との初期における交渉の一端を明らかにしたいと思う。

- 1 「臨濟宗に属しながら権門にも接近せず、臨濟宗の一般的傾向である都市的性格を持たない。また兼密禪の立場に立ち、「念起坐禪」を説き、念佛信仰の一面も指摘されている。（五來重氏「一遍上人と法燈国師」『印度学仏教学研究』第九卷第二号五一三頁）。
- 2 「円明国師行実年譜」「続群書類從」第九輯上三五〇頁。
- 3 「播州賀古郡無量寿院開山伝灯大僧都義能伝」「続伝灯広録野方」
- 4 「日本洞上聯灯錄」卷第二、『曹洞宗全書』史伝上二四四頁。
- 5 「北往訪瑩山瑾於洞谷」山間。本朝支那參得何辺事。明以レ手指曰。面前法堂。背後方丈。山呵呵大笑。由レ是駐レ錫相ニ与博約。山記曰。汝縁在雲州。行矣無レ滞於茲。授菩薩大戒。曰。尽未來際。無レ令断絶。」（『本朝高僧伝』卷第二十九、『大日本

仏教全書』一〇二、四〇六頁）。

- 6 「日本洞上聯灯錄」卷第一『曹洞宗全書』史伝上、二三三頁。
- 7 「加州伝灯寺沙門運良伝」「本朝高僧伝」卷二十六、三六六頁に「受業於本州玉泉寺了然明禪師。」

- 8 右同書「曾賀州大乘欠主席。瑩山和尚命レ良住持。」三六六頁。『延宝伝灯錄』十五「加州大乘欠レ主、瑩山和尚招レ師住持」「大日本佛教全書』一・八、二二二頁。栗山泰音氏『嶽山史論』参考。

照。

- 9 聖珍「孤峯和尚行実」「続群書類從」第九輯下五六九頁。
- 10 「延宝伝灯錄」卷七『大日本佛教全書』一〇八、一二一頁。
- 11 右同書一二一頁。『本朝高僧伝』卷三十一、『大日本佛教全書』一〇二、四二三頁。
- 12 「拔隊和尚行実」「続群書類從」第九輯下六四〇頁。

- 13 衛藤即応博士『宗祖としての道元禅師』四三頁。大久保道舟博士『道元禅師伝の研究』一七七頁。二四四頁。

二 道元禅師と心地覚心

從來道元下と法燈派の交渉の淵源は、『円明国師行実年譜』に、

- 師二十一歳。茲歲紀州海郡由良庄西方寺草創。^{今興國寺}建寺檀那由良地頭兼金剛三昧院別当沙門願姓。……芟夷荊棘。開闢梵刹。以安源將軍頭骨塔頭。祈二品禪尼妙果。四嶺皆有名。西鷲峯嘉名早立。故名山。乃寄田園。永擬供佛施僧。干時十月十五日也。雖然未終成功。且請梅尾明惠上人明弁、扁寺曰西方。使永平寺仏法

上人道元書額之篆字。⁽¹⁾

と見え、道元禪師が安貞元年（一二二七）十月十五日、帰朝直後紀州由良西方寺の上棟法会に際し、一世の高僧栴尾の明恵上人が、寺名をつけ、慶讃の導師を勤め、それと並んで禪師が額の文字を揮毫されたのである。この西方寺は願性が本願主で、彼は、

元是関東武士藤景倫。久侍右丞相兼征夷將軍源実朝。恰如隨形忠心。密承遺唐之命。遙下鎮西。承久元年正月二七日。忽遇將軍夭卒之日。便作剃髮染衣之賀。苦修莊嚴報地之善。登高野山隱居。相逢筑後前司入道常州人。孫鹿跡二郎入道西入。伝得將軍頭骨。西入侍於葬所拾得之。悲喜交深。知夙緣厚。將軍母儀鎌倉二品禪定尼真如視恋慕追福之志。終賜由良庄地頭職。⁽²⁾

と『行實年譜』に見える如く、もと実朝の近習で、実朝没後高野山禪定院、後の金剛三昧院に入つて入道し、実朝の菩提を弔おうとした事に二位政子が感動し、高野居住の資縁として彼を由良の地頭職とした。政子も嘉錄元年没したので、安貞元年に西方寺を開創したのである。⁽³⁾

明慧上人と道元禪師の事は、前掲の自南聖薰の編纂した『円明國師行実年譜』や覚心の弟子覚勇の『法燈國師之縁起』、『建長年代記』にも見え、野山前検校懷英の『高野春秋編年輯錄』八には、同年の条に

冬十月十五日。覺心師法燈國師遭レ招ニ請願性矣。遊ニ化由良海浜。創ニ剗三冊

西方寺或名改ニ興國寺建立御廣塔。落慶之慶導師明惠上人。⁽⁴⁾

明慧のことのみが出ているが、いずれにしても事実に違いない。⁽⁵⁾明慧と道元禪師との交渉はこの時持たれたと考えられるが、覚心との機縁がこの時生れたとすれば、後述するが、仁治三年（一二四二）三十六才で興聖寺で菩薩戒を受けるのももつとずっと早く訪ねていなければならない筈だと考えられる。

覚心は十五才、はじめ神宮寺で学び、後東大寺戒壇院で忠學律師について具足戒を受けた。この出家年令については、十九才説と二十九才説の二説がある。『法燈國師之縁起』は十九才登壇、『行實年譜』は二十九才登壇としている。しかし文暦二年二十九才の項に、

詣南都東大寺。登壇受具戒。牒文曰。信州近部県神宮寺童行覚心。本州縣人事。俗姓恒氏。見年二十九歲。投於當寺住持僧忠學律師。賜度牒。剃髮受具者。嘉祐元年十月廿日。左大史丹治吉成給。又治部省与剃度牒云。嘉祐元年十月廿日。於東大寺戒壇院受具云々。

二十九才出家としているが、七十才建治二年の条に、

師七十也。師二十九歲。嘉祐元乙未。登高野山。灸願性以還。至是歲四十三年也。願性四月二十三日示寂。至今月八九有月也。余所取者。師平生隨身之戒度牒也。首末符合也。若依慈願之縁起者。上文四十余載。可為五十余載也。不知慈願之記。別有憑拋。不然者。穿鑿失真乎。若又師十九歲。於東大寺受具戒。重登具二十九

歳。取牒為証照乎。然者失真益多。余感焉。後賢審之。十年之前後。
発心修行。於師用舍如何耳。⁽⁹⁾

と二十九才説に一沫の疑点を残している。

十九才説は先の『法燈國師縁起』の他に、『元亨釈書』『扶桑禪林僧宝伝』『高野春秋編年輯錄』等に見られ、五來氏もこの説をとり、二十九才説は『行実年譜』『東大寺牒』『治部省与剃度牒文』で、荻須氏はこの説に立っている。⁽¹⁰⁾『高野春秋編年輯錄』卷八嘉祿二丙戌(一二三六)年覺心二十才の時に、

秋八月十五日。覺心子乘三月明。往問往生院谷奈須七郎親張入道後号花千上人是也之萱庵。庵主向月觀座。覺心詠歌問心地。自加羅心我須須牟乃入道応声曰。寸萱我軒端乃月影。以詠歌即答。心子又烈声曰。汝覺心。我覺心而授_ニ私子畢。是則萱堂號安之元祖也。⁽¹¹⁾

と、覺心と萱堂聖との関係を考慮に入れれば、無視できない記事があるので私は十九才説を支持したいと思う。

しかし今道元禪師との関係に於いて見れば、二十九才出家ならば安貞元年西方寺開創には全く関係ない事になる。問題は十九才出家であるが、この時は丁度覺心は二十一才に当る。

『行実年譜』は二十一才の時としている以外何ら触れていないが、『高野春秋編年輯錄』卷八の安貞元年に「覺心師法灯」とあるのはうなづけない。何となればいくつも招請願性庚」とあるのはうなづけない。何となればいくら勝れているとは云え、十九才出家、二十一才の若者が一寺の開山住持として招請されるなど考えられないことだからで

ある。またこれは次の文章によつても裏書きされよう。

師五十二歳、正嘉二年戊午、通嗣書於無門和尚、罷禪定院住持、遊由良驚峯、有終老志、功德主願性拝請、以為開山住持、而同レ心同レ力、新於精藍、而資嚴後鳥羽禪定法皇仙駕、專為実朝公、真如禪定尼、追修道場安貞元年丁亥由良在地頭願性始從建立此西方寺三十老以為之、⁽¹²⁾追修道場二年間他宗也茲年回前意而改為禪利、拜請覺心長開山住持⁽¹³⁾

と『古事類苑』に、三十一年間は他宗で、覺心を開山住持に招いて始めて禪利にあらためられたからである。またたとえ、「覺心在高野、與願性成父子契約、依其資助、建長元年、師渡_ニ宋」⁽¹⁴⁾の間柄だったとしても、二十一才西方寺開創は考えられない事であり、従つて道元禪師との機縁はこの時点では無かつたと云つてよい。

先に触れた如く、明慧は金剛三昧院別當願性の拝請によつて西方寺慶讚の導師を勤め、翌安貞二年頼朝の三男といわれる貞曉上人の囑請によつて、

茲年一夏中。明惠上人高弁住山、依貞曉上人囑請也。詳貞貞永案。大樂院四座講式。明惠手跡。至干今毎年勤法会其始行未分明蓋此住山之時歟。⁽¹⁵⁾

大樂院に住した事が知れ、當時、西方寺からあまり遠くない有田郡内崎山寺により、非常に密接な関係を伺うことが出来るが、道元禪師も西方寺篆額の件は、やはり本願主願性の要請によつたと見るのが自然ではないかと思う。

しかし願性と禪師との関係を裏付ける直接的資料は何もな

い。禪師が後年、天福元年興聖寺開創の際、弘誓院が法座を構え、法堂造営の外護である正覺禪尼が実朝の後室に当る人

だとする説が、栗山・大久保⁽¹⁷⁾両氏から提出されている。面山の『訂補建撕記』は弘誓院教家の妻室とし、栗山氏は、久我通親の妹にして源実朝の室としている。大久保氏は久我通親

妹説を否定され、『山州名跡志』第二十一万祥山大通寺の条の記事を根拠に、実朝の室説をとり、『三祖行業記』の正覺は本覺の写誤かも知れないとされている。いずれにしても、もしそうだとすれば、実朝の命で入宋せんとして、彼の死に会い、出家した願性と禪師との関係もこの面から考えられるが、⁽²¹⁾正覺尼との関係は、逆に西方寺で出来た機縁とも考えられるのである。⁽²²⁾

また禪師の母方の祖父松殿禪定殿下基房公が、元久元甲子

(一二〇四)「三月十八日辛巳松殿禪定殿下^{基房}公御來詣」⁽²³⁾と高

野山に参拝し、また貞応元壬午(一二二三)十月九日。「松殿禪定閣下登御。是為追慕之想故也。第二度御登山也。」⁽²⁴⁾と二

度目の参詣をしている事からも、何らか考えられるが、これ

とて積極的に証するものは何もない。道元禪師が入宋前に高

野山を訪れた形跡はないと考えられるので、高野山金剛三昧院もしくは西方寺に於いて、帰朝わずか一ヶ月の間に、禪師の道名が明慧と並んで知れ渡つていたのに、他にそれなり

の理由がなければならないであろう。

1 「円明国師行実年譜」「続群書類從」第九輯上伝部三四七頁、三四八頁。

2 右同書、覺心二十一才条、『高野春秋編年輯錄』八、承久元年条参照。同年正月二七日夜「將軍実朝卿行右大臣拝賀於鶴岡八幡宮。惡禪師公曉使下刺客弑^中實朝鄉干階前。是酬父讐也。」『大日本佛教全書』一三一。一三九頁。

3 「円明国師行実年譜」「続群書類從」第九輯上伝部、三四八頁。

4 『金剛三味院文書』八八号、「葛山五郎入道願生書状」、西方寺は金剛三味院と密接な関係において創建された。嘉祐二丙申年秋九月「葛山入道願性得^ニ金剛三味院主權少僧都法眼和尚行勇禪師之兩契狀。去四月五日以納^ニ實西方寺法藏。是為_下後世自^ニ金剛三味院別當^ニ仮名^ニ於^ニ據領^ニ令^チ不^レ可^レ惱^ニ西方寺^ニ也。」(『高野春秋編年輯錄』八、『大日本佛教全書』一三一、一五〇頁)。

5 『高野春秋編年輯錄』八『大日本佛教全書』一三一、一四六頁。

6 『円明国師行実年譜』『法燈國師緣起』『古事類苑』参照。

衛藤博士は禪師と明慧との関係について、「上人と道元禪師とは同時代に前後して、上人は寛喜四年(皇紀一八九二)道元禪師帰朝後五年にして入寂しているから、設ひ短い期間とはいへ、兩人の間に道交があつたのではないかと思はるが、文献の上では何等之を知るべきものが無い。」(『宗祖としての道元禪師』四三頁)とされながらも、両師の著作を通して、宗旨の根抵より来るものと隨機の方便説の相違を見ながら、その求道の心要、嚴肅な家風と綿密な行持の精神に於いて共通性を見ておられる。西方寺開創をめぐって、道元禪師が寺額の篆書をされたという事は、具体的にはその場に出席していなければ出来ない。

い事であろうし、明慧上人も西方寺の近くの有田郡内崎に居住していたのであるから、交渉を持ったと見て間違いないのではなかろうか。

7 「元亨釈書」卷第六淨禪一、釈覺心条、『国史大系』三十一、
一〇一頁参照。

8 『円明国師行実年譜』『続群書類從』第九輯上伝部三四九頁。
9 右同書、三五六、三五七頁。

10 出家年次について、伝記に禪僧としての面を表面に強く出している思遠系統の『行実年譜』は二十九才説をとり、念佛者としての覺心の一面を伝える慈願系統の『法灯国師縁起』は十九才説をとり、伝記に二系統が存する事が知られる。

11 五来重氏「一遍上人と法灯国師」『印度学仏教学研究』第九卷二号九九頁。

12 萩須純道氏『日本中世禪宗史』八八頁。行勇は延応元年(一二三九)北条泰時の招請によつて、覺心を伴つて寿福寺に入つた。覺心三十三才の時で、寿福寺において重要な紀綱の役を果し、寺務を統轄した。二十九才出家とするとそれまで足掛五年高野山にあつて、伝法院の覺仏阿闍梨に就いて密學を、正智院の道範に密教秘軌を学び、金剛三味院行勇に謁し改衣帰禪し、また大和三輪の蓮道から密灌の奥義を受けたりしてゐるので、兼修禪的性格を考慮にいれても、五来氏の指摘する通り、少し短時日に過ぎると思われる。

13 「高野春秋編年輯錄」卷八『『大日本佛教全書』一三一冊一四六頁。「法灯円明国師遺芳錄」「大日本佛教全書」九六冊。二一〇頁。これを『非事史事歴』萱堂部は弘安九年、覺心八十才

のこととし、『法灯国師縁起』師八十才頃に「爰有三一人俗客來于西方寺云 吾有三發心志一請為三和尚之弟子一師即剃髮名喚三覺心一發心者云 犯三師譯一多レ恐 師曰有三意旨一唯可レ從レ言、汝高野有レ緣 連登山而於三萱原ニ可レ唱三念佛一賜三鉢鼓一丁」とあり、覺心の弟子覺心の事としている。心地覺心八十才頃は洛東勝林寺に住した後由良に帰り、弘安八年(一二八五)内大臣花山院師繼は長男忠年追修のため妙光寺開山として覺心を迎えたので京都にあつた。上洛が上聞に達し、龜山上皇、後宇多天皇に禪要を説いたが、また由良に帰つてしまつた。従つて仮りに『高野春秋編年輯錄』卷八嘉禄二年の記事が、八十才頃の時の誤記としても、如上の事情から覺心が高野山にいたとは考えられない。更に同記事中にある「覺心子」の「子」が、当人の事でなく、仮りに「弟子」を意味するとしても、庵主との問答に詠んだ歌は覺心本人の作として、『法灯円明国師遺芳錄』に記載されているので、これは覺心當人を指すとする見方も捨ててゐる訳にはいかない。従つてこの記事は無下には退ける事は出来ないのである。

14 『古事類苑』宗教部六十八、一〇〇七頁。

15 右同書、一〇〇七頁。

16 「高野春秋編年輯錄」卷八、『『大日本佛教全書』一三一冊、一四七頁。

17 栗山泰音氏「俗縁から観た正覺尼公と道元禪師」『道元』昭和十三年、六・七号。

18 大久保道舟博士『道元禪師伝の研究』二〇九頁。

19 「正覺尼ハ、弘誓院ノ室カ未考、弘誓院トハ拾芥鈔云 八条

南、東洞院東、大納言教家宅」『『曹洞宗全書』史伝下九八頁。

大久保博士は弘誓院室説も否定している。前掲書二〇九頁。

20 「縁起云、当寺六孫王旧迹……頼朝卿後室二位禅尼、号法名本覚」坊兩尼公合心、創_三當寺_一」(『山

州名跡志』二一万祥山大通寺條)と実朝公の室が本覚尼とあり、
号法名如実
門内府信清女
北條時政女

『行業記』に「正覺尼建_二法堂_一」(『曹洞宗全書』史伝上三頁)。

『三大尊行状記』も同じ。とある正覺は本覚の誤りかも知れないとされているが、二品禅尼の法名「如實」も「真如」と記されている例も見えるから(『高野春秋編年輯錄』)、ありえないことではない。

21 願性が禪定院を改めて、金剛三昧院とした際、頼朝の庶子(実朝異母弟)で、政子如實尼公から鐘愛を受け(「得_二位之鐘愛。而終三天年於經智坊」)た一心院住持貞曉上人(「供養導師住寺行勇和尚勤修之。貞曉上人為_二祝願。」『編年錄』一三九頁)が重要な呪願師を勤めている。彼は明慧を一心院住持に招いた人でもあるが、正覺尼には義弟に当り、願性を中心として道元禪師との関係も一応考えられる。

22 面山の『訂補建撕記圖会卷之下』に、永平寺建立に関して、「當寺者、奉_ニ為二位殿、右大臣殿菩提、御建立候之上、被_ニ始行_ニ布薩說戒_一候。」(『曹洞宗全書』史伝下一二〇頁)の文があり、永平寺建立は波多野義重が政子と実朝の恩顧を感じて創建したとしている。面山は何によつたか不明だが、これは願性の金剛三昧院及び西方寺の開創の因縁と酷似している。これは波多野氏が藤原景倫葛山五郎願性に擬せられているようで、にわかに信ずる訳にもいかないが、かかる説が生れる背景は西方寺と道

元禪師の関係、及び後の正覺尼との関係を伺がわせるものとして無視出来ない。

23 『高野春秋編年輯錄』卷七(『大日本佛教全書』一三一冊、

一三〇頁)

24 右同書、卷八、一四三頁。

三 道元禪師と隆禪

そこでこの問題について若干の検討を加えてみたい。

既述の如く金剛三昧院の前身は禪定院であり、北条政子が榮西(一一四一—一二一五)を請じて落慶供養を修して開祖とした。承久元年(一二一九)実朝没後、行勇(一一六三—一二四一)が禪定院を金剛三昧院と改めて開山となつた。そこで榮西の弟子で、金剛三昧院を通して道元禪師と交渉を持ち得る可能性のある者はまずこの行勇が一応考えられる。行勇は榮西滅後建保三年(一二二五)から承久元年(一二二九)までは、東大寺の大勧進職に補せられたり、寿福寺の第二世として鎌倉にあつた。その後禪定院主として高野山にあり、また久しく建仁寺に住し、再び金剛三昧院に帰り、建仁寺の寺基に準じて禪密律の兼学道場とした。⁽¹⁾

行勇が建仁寺にあつた時期と期間は不明だが、覚心が行勇に投じて禪密の二教を受けたのは嘉禄元年(一二二五)からであるから、行勇もしばらくは禪定院に居たと考えねばなるま

い。だが二年後の西方寺落慶には直接関係ないと考える。行勇は延応元年(一二三九)寿福寺に入る何年か前までの相当期間建仁寺にあつたのではなかろうか。⁽²⁾

しかし道元禅師とは一応関係なかつたと考えるのは、行勇は西方寺には直接関係ないと考えられること。禅師は栄西の弟子の明全と隆禅については諸所に触れているが、行勇については一言も触れていないこと、等である。

そこで叢山系の明全は全く問題がないが、次に視野に入ってくるのは、従来全く注目されたことのない、道元禅師と天童山で同参だつた隆禅についてである。

隆禅の事歴は殆んど知られる所なく、資料も極めて乏しく、以下の論述は推論の域を出ない。それはこの隆禅と金剛三昧院二世の中納言法印、仏眼房隆禅と同一人物ではないかといふことである。そしてこの隆禅を通して、帰朝後わずか二ヶ月にもかかわらず、金剛三昧院あるいは西方寺との交渉を持つ何らかの役割を果してゐるのではないかと考へるのである。

道元禅師による隆禅は『正法眼藏嗣書卷』『正法眼藏隨聞記』二、『永平廣錄』十、『宝慶記』『伝光錄』『建撕記』『訂補建撕記』等に述べられており、その他『却退一字參』『道元禪師伝の研究』『正法眼藏全講』五、に同内容及びその関連記事がある程度である。

即ち道元禅師入宋の貞応二年(一二二三)天童山で、隆禅が

仏眼清遠の遠孫伝藏主の嗣書を拝覧する仲介の労をとつてゐる文が見える。『宝慶記』には、如淨との問答で、

坐禪弁道納僧尋常直須洗足。身心脳乱之時直須默誦菩薩戒序。問云。菩薩戒何耶。和尚曰。今隆禅所誦戒序也。⁽³⁾

と隆禅が菩薩戒序を誦していた事が述べられ、長円寺本『隨聞記』二には、それに関連して、

実ノ得道ノ為ニハ、只坐禪功夫、仏祖ノ相伝也。是レニ依ツテ、一門ノ同学五根房(「五眼坊」面山本)故用祥僧正ノ弟子也。唐土ノ禪院ニテ、持齋ヲ固ク守リテ、戒経ヲ終日誦ゼシヲバ教ヘテ捨シメタリシ也。⁽⁴⁾

とある。また禅師が在宋中、鉄漢禪を開いた人として称えた「与郷間禪上座」の偈

錫駐玲瓏不動著、功夫弁道自然図。回光転眼幾経日。退歩翻身已積年。穿却枯牛閑鼻竅、打開仏祖鉄漢禪。一生跳出聖凡路、侍役何生木耳縁。⁽⁵⁾

を呈した相手の人である。これは宝慶元年(一二二五)に天童山で明全・隆禅と再会したことであろう。

この隆禅は面山の『訂補建撕記』上によれば、マタコノ隆禅ハ、歌人定家ノ弟ニ、寂蓮ト云アリ、其ノ子息出家シ、隆禅ト称ス、祖師同時ノ人ニテ、祖師より先ニ、入宋セラレシナルベシ。⁽⁶⁾

とあって、以後曹洞宗門ではこれを受けており、宇井博士も

これを受けている。⁽⁷⁾更に万仞道坦の法嗣の石天童鱗が、隆禅の入宋前に詠じた歌を伝えている。しかしながら、この隆禅は『尊卑分脈』⁽⁸⁾『大日本史』、『本朝画史』によると、藤原定家の弟定長（法名寂蓮）の子ではなく孫である。しかも寂蓮は定家の弟ではなく、従兄にして義理の兄に当る。即ち定家の父藤原俊成が僧俊海の子、甥の定長を養子とし、その後定家が生れたので、定長は避けて出家して寂蓮と名を改めたのである。

隆禅はこの寂蓮の子保季の子、つまり孫に当る訳である。⁽⁹⁾しかし定家は応保二年から仁治二年（一一六二—一二四一）まで八十才、寂蓮は建仁二年（一一〇二）寂だから、年代的には隆禅は道元禪師と同時代になる訳である。

当時『新古今集』の撰者である俊成・定家等の幽玄の新歌風が隆盛となり、これが達磨歌と悪評されていた。鴨長明はおぼつかなく心籠りてよまんとするほどに、果には自らも心得ず、

違わぬ無心所着になりぬ。か様の列の歌は幽玄の境にはあらず、
げに達磨宗とも、是をぞ云ふべき。⁽¹⁰⁾

と『無名抄』（「近代古躰事」）で批評している。定家は「自文

治建久以来⁽¹¹⁾称⁽¹²⁾新義非拠達磨歌⁽¹³⁾為⁽¹⁴⁾天下貴賤被⁽¹⁵⁾惡欲⁽¹⁶⁾棄置⁽¹⁷⁾（『拾遺愚草員外』）として、一時はやめようと思ったことが述べられている。これはちょうど新興の禅宗である大日能忍の日本達磨宗が隆盛になつた頃で、彼等の歌風が達磨歌と呼ばれたころには、能忍の達磨宗が影響或いは関係しているので

はないかと云われる。⁽¹²⁾

従つて定家には、新来の禪への関心も相当なものがあつたことが伺える。更に晩年になつて、彼自筆の『兵範記』の裏打文書に使われている彼宛の手紙に、仏法房なる者が山僧の悵恨を受け、そのために住居が破棄せられて洛中を追放されるという意味の文章がある。

仏法房事、山僧之張□□□重極之位成はて候、□□□様は未承定候、破棄住所、可追洛中なとそ申合候と承候。⁽¹³⁾

こういった事柄から、また道元禪師の兄、源通具も『新古今集』の撰者の一人だつた事と共に、定家は兄の孫隆禅を介して道元禪師に特別の関心を懷いていたのではないか。

それでは次に隆禅の年令、入宋帰朝の年次は何時か、全く分らないが、可能的な検討を加え、禪師との関係を通して考察して行こう。

まず入宋年次であるが、『正法眼藏嗣書』卷に、

嘉定のはじめに、隆禅上座日本國の人なりといへども、かの伝藏主やまひしけるに、隆禅よく伝藏主を看病しけるに、勤労しきりなるによりて、看病の労を謝せんがために、嗣書をとりいだして、礼拝せしめけり、みがたきものなり、与爾礼拝といひけり、それよりこのかた、八年のち嘉定十六年あきのころ、道元はじめて天童山に寓止するに、隆禅上座ねんごろに伝藏主に請して、嗣書を道元にみせし。⁽¹⁴⁾

と、禪師の入宋貞応二年より八年以前に入宋している事が分

る。それでは何時頃かという事になるが、「嘉定のはじめ」を文字通りに取れば、嘉定元年、承元二年（一二〇八）になる。⁽¹⁵⁾ 「はじめに」という用例は寛喜三年著述の『弁道話』にも見える。即ち「大宋紹定のはじめ本郷にかへりし、すなはち弘法救生をおもひとせり」とある。「大宋紹定のはじめ」は安貞二年（一二三八）に当り、帰朝の嘉祐三年即ち安貞元年と矛盾する。「本郷にかへりし」を京都と解釈し、この矛盾を解決する見方も存するが、私は禅師が中国の年号を厳密に計算した上でなく、記憶によつて述べたものだと思う。従つて帰朝後五年（満四年）にしてかかる例が見られるから、仁治二年（一二四一）帰朝後十五年目にして書かれた『嗣書』卷の「嘉定のはじめ」もかなり巾をもたせて見てもよいと思う。まして嘉定は十七年まで続いたからなおさらで、禅師入宋より八年以前嘉定七・八年頃迄と見てよいのではなかろうか。

次に入宋時の年令であるが、北宋南宋を通じて入宋日本僧は、⁽¹⁷⁾ ほぼ一三一名のうち、入宋時の年令が分る者は比較的少なく、著明な者二十名についてみると、二十代は、明菴栄西二十八才、覺阿二十九才、永平道元二十四才、法忍二十九才、無象静照十九才、南浦紹明二十五才、約翁德儉二十一才の七名であり、三十代は俊芻三十五才、円爾弁円三十四才、妙見道祐三十九才、一翁院豪三十五才の四名であり、寂昭四十三才、栄尊四十一才、重源四十七才、安覓良祐四十四才、明全四十

才、覺心四十三才、徹通義介四十一才、白雲慧曉四十四才の八名である。五十代は見当らず、栄西の再度入宋が四十九才、六十代では成尋六十二才で、最高六十二才、最年少十九才、無文元遷も二十一才で入元しており、二十代も相当いる。

そこで伝蔵主と隆禪との関係を考慮に入れ、また天童山で道元禅師が隆禪に「戒經ヲ終日誦ゼシヲバ教ヘテ捨シメタ」と、師の栄西が建保三年（一二一五）入寂している等の事柄を考え合わせると、この頃入宋したとも考えられ、年令もそれほど開きがあったとは考えられず、十才以内位で入宋時の年令も二十代も前半に近いとの想像も可能ではないか、前掲の隆禪に与えた偈の内容からも考へられるのである。更に想像を逞しくして云えば、その内容から隆禪が道元禅師のどちらかの帰国に当つて禅師が与えたものとも考えられる。また隆禪はその坊号からして、仏眼清遠の系統の法を伝えるかの伝蔵主に嗣法したとも憶測される。

よしこれが一片の想像説として取るに足らないとしても、無門慧開と覺心の文書の往来に見られるように、⁽¹⁸⁾ 道元禅師の事が高野山に伝えられていたであろう事は上述の諸点から考える。また金剛三昧院隆禪の坊号と道元禅師の伝える一門の同学隆禪の坊号に共通性が見られる事柄が同一人物たる事を暗示すると共に、十分考へられる事と思うのである。

17 積東初『中日仏教交通史』三五一頁以下。

18 「円明国師行実年譜」『続群書類從』九上伝部三五二頁以下。

19 長円寺本は「一門の同學五根房」となつており、流布本は「五眼房」である。どちらが正しいかは不明だが、間違ひ易い字である。他の名称との関係から一応「五眼坊」に従つておく。

五眼の第五は仏眼で前四眼を含むから、五眼坊と仏眼坊と共通性がある。なお「一門の同學」を水野弥穂子氏は「建仁寺の門下の意味」に見ており(『古典文学大系』八一、三三三頁)、古田紹欽氏も「建仁寺栄西の同じ弟子仲間」(古田氏訳註『正法眼藏隨聞記』一、一八頁)と見て、「シナの禪院では持齋を堅く守り、戒律の經典を終日誦しているとして、戒行持齋を宗旨としているのを誤りであると教えてこの態度を捨てさせた」としている。

これは五眼坊がシナにいる時の事なのか建仁寺においてなのか意味がはつきりしないが、どうも建仁寺において禪師が隆禪に教えたと見ているようである。私は「一門の同學」は建仁寺のみでなく、金剛三昧院の高野山系の栄西の弟子達も含め、更に天童山の如淨下で同学同参だったという二重の意味に取り、『宝慶記』記事との関連において、天童山での事と見たい。

四 金剛三昧院と隆禪

鎌倉仏教は専修的性格が一般的特徴として云われるのであるが、禅宗においては道元禅師の只管打坐の純粹禪以外は兼修禪的性格が一般的であった。その系統は栄西・円爾弁円を中心とする叡山系と栄西・行勇・覺心の高野山系の天台と真

言に分けられる。隆禪は栄西の弟子でも、その経歴からして高野山系の人であるから、入宋前も高野山禪定院に關係があつたと思われるので、次にこの面から隆禪の事歴を検討してみよう。前述の如く彼は栄西の弟子で、行勇の後を継いだ金剛三昧院の二世である。金剛三昧院は、叡山に対する建仁寺の関係と同様に、高野山に於ける兼修道場としての性格を持つたものである。當時高野山を中心として、年代的に該当する隆禪は三名いる。

第一の隆禪は『血脉類集記』及び『真言宗年表』によると嚴定院に於いて寛瑜から建徳元年(一二二一)に伝法灌頂を受けた人である。

隆禪阿闍梨二十六、大夫僧都、右京権大夫隆信息
(1) 建暦元年三月二十六日戊寅火曜於二嚴淨院受之。無庭儀色衆十口。

貞応二年(一二二三)三月二十七日、正範僧都が南院で伝法灌頂を受けた際、色衆のうち、散華の一人として列席しているので問題にならない。

第二の隆禪は法印権大僧都、宝治元年(一二四七)嚴瑜から伝法灌頂を受けた。

隆禪土佐法印権大僧都、同年(宝治元年)九月二十三日、癸酉張宿水曜。於二大倉権大夫殿薬師堂受之、色衆八人。⁽²⁾
 大倉権大夫殿薬師堂で受け、土佐の出身とも考えられる。十

五代宏教律師付法の弟子権大僧都能禪から印可を受けている。従つて金剛三昧院には関係ない人である。また正嘉元年（一二五七）十月の法要に於いて、職衆の一人として参列している隆禪がいることが『吾妻鏡』に見えるが、⁽³⁾ 権律師で寺門の人とも見られるので無関係である。

第三には『高野春秋編年輯錄』九、『史料綜覽』五にみえる人であるが『真言宗年表』には、「永仁二（一二九四）、幕府高野山金剛三昧院隆禪をして丹生社頭に異国降伏の法を修せしめ」⁽⁴⁾ た人である。これが金剛三昧院中納言法印仏眼坊隆禪であるが、その俗系は分らない。曹洞宗門側にある隆禪の記録は、彼の祖父及び定家は、源通具、藤原家隆、雅経等と共に『新古今和歌集』の撰者であり、定家はその撰者の代表であり、特に実朝の師でもある。実朝は彼に師事し、「詠歌口伝」「万葉集」を与えられ、万葉調の作歌に精進して『金槐集』を残している。こういった点から、高野山禪定院との関係を考慮に入れれば、今迄述べ來たった諸点と共に同一人物たるを証する助証にはなると思う。

次にこの隆禪の数少い事歴を辿つて見よう。『高野春秋編年輯錄』八に

延應元年三月、行勇禪師將^三覺心上座。自^二金剛三昧院^一還^二住鎌倉^一龜谷山壽福寺^二。是依^二北条氏之^一泰^時憫^請也。以^二金^三院^二後職^附也。⁽⁵⁾

とあり、仁治二年（一二四一）行勇逝去の項に「而後勇又讓^ニ

住職於中納言法印隆禪^ニ而歸^ニ鎌倉^ニ成^ニ壽福寺長老^ニ遷化也。⁽⁶⁾ と延應元年（一二三九）隆禪に住持位を譲つたことが見える。建長元年（一二四九）二月覺心は入宋し、建長六年（一二五四）六月帰朝。この項に

六月上旬。覺心師

法燈^{國師}歸^レ自^レ宋。則登山謁^ニ禪定院主^ニ。中納言法印隆禪^ニ為^ニ第一座^ニ。

即日擢為^ニ第一座^ニ。隆禪抽^レ覺心^ニ。（6）

とある。今この同じ項目が『円明國師行寔年譜』では「在宋首尾六年。從葦屋津纜。紀伊湊上岸。徑謁高野禪定院。勇公即日擢為第一座⁽⁷⁾」とあって、既に十二年前に示寂している行勇が即日覺心を擢して第一座となしたことになつてゐる。⁽⁸⁾ これは明らかに隆禪の間違いである。『年譜』『縁起』等が行勇と覺心中心となつてゐるのは、後に覺心中心の興國寺の系統を重視したためと考えられる。もう一つは、この金剛三昧院は、後には嘉元二年（一二〇四）に長老となつた実融証道上人の系統が入つてき、その一流によつて占められたのである。

實融証道上人補^ニ金剛三昧院長老^ニ。（意教上人之附法也。後世金三院家一流流之鼻祖号^ニ實融方^ニ。又是東寺再興之大願主也。）（9）

意教上人頼賢の法を受けた実融の長老就任の項、『編年輯錄』卷九に右の文が見えるが、この系統は『密宗血脈鈔』第三に、

然頼賢遂不^レ知^レ之。是三寶院傍流謂也、就^レ其頼賢入^ニ松橋室^ニ對^ニ禪真^ニ雖^レ習^レ之亦非^ニ正嫡^ニ、金剛三昧院實融付^ニ頼賢^ニ而受法^ニ。（10）

は直接には無関係と考えられ、どちら側にも彼の詳しい伝記が見られないのではないかと思うのである。

さて正嘉元年(一二五七)春、

帰宋以後繼踵金剛三昧院前年行勇入鎌倉之後。隆禪替住職之又禪之後覺心住持之

(11)

とあって、覚心五十一才住持となり、隆禪はこの年十九年間の座を覚心に譲り、覚心は翌年正嘉二年「覺心禪師寵^ニ退禪定院^ニ移^ニ住由良鷲峯山寺^ニ是依^ニ願主入道願性之勸發^ニ所^レ為^ニ終老之設^ニ也」⁽¹²⁾と退院し、文永元年(一二六四)まで止まり、

後由良興國寺に移つたのである。⁽¹³⁾『編年輯錄』では隆禪の後

覚心が継いで第三世と見ているが、隆禪住持の間に、あるいは伝えられる悟通藏房阿闍梨、榮信(淨光房)、真空(廻心坊)、

覚心の次第住持があつたのかも知れない。⁽¹⁴⁾

いずれにしても覚心の住持期間は短時日であるが、これに先立ち、入宋前仁治二年(一二四一)行勇が東勝寺で示寂したので鎌倉を去り、翌年京都深草に道元禪師を訪ねて菩薩戒を受けている事に関しては先に触れたが、禪師と覚心との関係はこの時始めて成立したと見るべきで、間接的には隆禪の何らかの影響、指示があつたものと推測するものである。

次に退院後の隆禪はそのまま高野山に止まつていたらしく永仁二年(一二九四)夏四月二十日、おそらく、文永、弘安に続く第三次元寇を恐れてか、鎌倉両執権は、

鎌倉相模守貞時、陸奥守宣時、命^ニ高野山僧中納言法印^一。

金剛三昧院主隆禪

異国降伏の祈願を隆禪に命じている。『編年輯錄』九、『史料綜覽』五、『真言宗年表』による限りでは、少くとも永仁二年までは生存している事になる。従つて前にも触れている如く、同一人物とすれば彼は百才前後の長命を保つことになる。

全く考えられない事ではないが、資料を通して一応可能な仮説と云えよう。

1 「血脈類集記『真言宗全書』一四、一七五頁。

2 「血脉類集記』『真言宗全書』一四、二三六上。

3 『吾妻鏡』第四十七、六五四頁。正嘉元年十月の条。(一二五七)。

4 『真言宗年表』三四二頁。『高野春秋編年輯錄』九『大日本佛教全書』一三一冊、一八四頁。

5 『高野春秋編年輯錄』八、『大日本佛教全書』一三一冊、一五一頁。

6 右同書、一六三頁。

7 『円明國師行実年譜』(『続群書類徒』九輯上伝部)三五二頁。

8 『円明國師行実年譜』の明白な誤りである。荻須純道博士

9 『日本中世禪宗史』)一〇二頁。

八九頁。

10 『密宗血脉鈔』(三冊)第三、東洋大學図書館蔵。

11 『高野春秋編年輯錄』九(『大日本佛教全書』一三一冊)一六四頁。『円明國師行実年譜』には、「茲歲繼踵禪定院弁香。為無門

拈出。」と禅僧としての面を伝えている。

- 12 『高野春秋編年輯錄』九（『大日本佛教全書』一三一冊）一
六五頁。

- 13 「願性入道以三西方寺（又号興國寺）鷲峰ニ永讓与于覺心禪師。師起レ

自三金剛三味院ニ移ニ住於由良一也。考。正嘉二戊午天。雖下退三出禪定院。老於鷲峰。故加三永字。詮其再住之文意。但曰正嘉元年退禪定院。雖居由良。其間亦願性全為西方寺別當。仍覺心師者偶居修禪寺耳。所以者何。自信州勾引老母。來。而令休息修禪寺。号三尼寺。云云。以知本自有修禪寺矣。（『編年輯錄』九、一六九頁。）金剛三

味院退院後、興國寺に入つて間もなく、願性が別当としていたので、覺心は老母孝養のため修禪寺にしばらくいたようである。

- 14 萩須博士『日本中世禪宗史』九二頁。

- 15 『元亨釈書』卷六淨禪一、（『国史大系』三一）一〇一頁。

- 16 『高野春秋編年輯錄』九、（『大日本佛教全書』一三一冊）一

八四頁。中納言法印は、金剛三味院主隆禪の官名とあるが、正嘉元年（一二五七）から二年（一二五八）まで、覺心が住持し、退院後文永元年（一二六四）頃まで留っていたのであるが、覺心退院後すぐかどうか不明だが、隆禪が再住していたとも見られる。

以上乏しい資料のうちから、道元禪師と心地覺心の関係、

更に隆禪との交渉をたどり、大まかな推論を進め、試見を述べた。そして言及できなかつたが、金剛三味院、もしくは法燈派における隆禪の立場があまり重要視されていない事が隠

五 おわりに

画のように浮びあがつてくるのである。そしてまた伝記資料の伝承の系統によつて、竜蛇混雜し、かなり違つた人物像を示し、混乱する事が多いのである。

隆禪は栄西の弟子と云つても、行勇や覺心の一所不住宅と違つて、極めて定着性の高さが印象づけられる。⁽¹⁾また非常に地味な戒律中心の目立たない学道の人ようであるが、その思想的立場の把握という事になると不可能に近いであろう。ただ一般的には禪密戒兼修の人とは云えよう。

また坊号の相違については、例えば『高野春秋編年輯錄』が伝える二品禪尼の法名が「如実尼」とあるのが、『円明國師行寔年譜』や『本朝高僧伝』には「真如尼」とある例になら、仏眼房と五眼坊（五根房）の類似性を見、同一人として見る主な根拠の一つとしたのである。

無門慧開（一一八五—一二六〇）から法を受けた覺心の他には息庵宗、瞎驢無見、放牛等があるが、覺心の法系のみ榮えた。そして彼の権力指向性の少ない性格が反映してか、その禪風は慈雲妙意の国泰寺や抜隊得勝の向嶽寺等地方において発展した。また興國寺も庶民信仰の熊野神社との関係も密接なものがある。⁽²⁾

以前から日本曹洞宗の特徴として四点を見、検討してきた。⁽³⁾そしてその基本的性格は庶民性に帰する事が出来るが、両派が歴史的交渉を持つようになつたのも故なしとしない。本論

ではとりあげなかつたが、特に覚心と念佛、萱堂聖集団、高野聖との関係交渉が指摘され、その融和的庶民性が特色となつてゐるが、曹洞宗における禅密融合的な性格と一脈相通するものが看取され、歴史的交渉が持たれてきた要素の一つと考えられる。今回は極めて初期の交渉の発端とも云うべき問題をとりあげ、以後の歴史的交渉を具体的に捉えて行く足がかりとして、道元禪師が帰朝直後、高野山とわずかながらも接触を持つたと考えられる問題について、隆禪を通して伺つたのである。

そしてこれはまた「弁道話」に示される

いまわが朝につたはれるところの法華宗、華嚴教、ともに大乗の究竟なり。いはんや真言宗のごときは、毗盧遮那如來したしく金剛薩埵につたへて、師資みだりならず。その談するむね即心是仏。是心作仏といふて、多劫の修行をふることなく、一座に五仏の正覚をとなふ、仏法の極妙といふべし。⁽⁵⁾

とある意味を如何に受けとるかという問題にも進んで行かねばならないであろう。

1 天童山安居中もほとんど他出しなかつたと思われる。

2 官崎円遵氏「法灯円明国師之縁起について——中世における唱導と絵解の一例——」『禅と日本文化の諸問題』一一〇頁。

3 拙稿「日本曹洞宗の歴史的性格(一)」『駒沢大学仏教学部論集』第三号、「初期曹洞宗に於ける國家把握の立場」『宗学研究』十四号。「初期曹洞宗と義雲の立場」『宗学研究』十五号。「初期曹

洞教团の基本的性格についての一考察」『印度学仏教学研究』⁴二十一卷二号、その他。

4 五来重氏「一遍上人と法灯国師」『印度学仏教学研究』第九卷第二号。

5 「弁道話」『正法眼藏』(岩波文庫上、六二頁)